

識別番号 K 2
 研究課題 アウグスティヌス聖書解釈学の総合的研究
 研究代表者 中村秀樹（中世思想研究所・文学部哲学科）
 研究協力者 田内千里（文学部哲学科）
 Summary Our reseach aims to clarify the meanings of Augustinian Biblical hermeneutics in his famous - and misunderstandable - work „*De doctrina christiana*“. This work is the *key* of the Augustinian theology and found very wide reception in the European Middle Ages. In order to understand the European Christianity in the Middle Ages, a precise study of the „*De doctrina christiana*“ is crucial. In cooperation with *Hugo von St. Viktor Institut für Quellenkunde des Mittelalters, Frankfurt/Main (Germany)*, we try to fulfill *desiderata* of the reseach situation today: to provide a new precise Japanese Translation of the work and to investigate its decisive medieval reception through examination of the Biblical Theology of the Parisian abbey Saint-Victor.

日本を含め現代世界のあり方に大きな影響を与えているのは、ヨーロッパ思想に源を持つ様々な考え方であるが、ヨーロッパ思想を根底から理解するためには、その伝統の核心にあるキリスト教教父思想およびその展開としての中世キリスト教思想の徹底した研究が必要となる。このようなヨーロッパの伝統的キリスト教思想を基礎付けた最も重要な思想家の一人が、アウグスティヌス（Aurelius Augustinus 430 年歿）である。北アフリカの司教で、『告白 *Confessiones*』の著者としても知られるこの神学者は、その聖書解釈理論を主著の一つ『キリスト教の教え *De doctrina christiana*』において展開した。キリスト教神学の全体は聖書に基礎付けられるため、本著作は同時に著者の神学とその教育理念に関する見取り図ともなっている。そのため本著作は、その後の思想史において広範な受容を示しており、キリスト教的ヨーロッパ思想の理解のために極めて重要な研究対象である。

1. 先行研究の現状

国内研究の現状を見るならば、現行の邦訳ではその本来的文脈であるキリスト教神学が十分に考慮されていないため、訳文は不正確であり、また現代記号論や解釈学の視点からの表層的で的外れな解説がなされている。こうした誤った傾向は日本国内での本著作に関する研究にも共通して見られるが、それは国内の研究が神学的文脈を軽視した英語圏の一部の研究に依拠してきたことにも原因がある。ドイツ語圏及びフランス語圏では30年以上も前に、この広範な影響を及ぼした著作が徹底してキリスト教神学の観点から読まれるべきであり、それによってはじめてその重要性が本来的に開示されることが指摘され、それについて十分な議論が展開されたが、国内の研究はこの成果を十分に考慮していない。またキリスト教神学が人文的学問領域において重要な位置を占めるヨーロッパとは異なり、国内では特殊な学問として扱われるため、キリスト教神学を十全な仕方で学ぶ思想研究者は少ない。その結果、キリスト教神学そのものに関する知識不足が目立っており、それも上記の誤りを助長している。他方、国際的な研究の状況を見るならば、『キリスト教の教え』は、特にその中世における受容史に関してまだ解明されなければならない点を多く残している。

2. 本研究の目的と計画

(1)そこで本研究では、国内研究に対する貢献として、研究代表者と研究協力者が中心となり『キリスト教の教え』を本来の神学的文脈に則して新たに厳密に邦訳し、註解を行い、刊行する。その際、翻訳においては正確な原文の理解を提示し、註解においては現在に至るまでの国内外の諸研究を網羅的に総括し、評価する。また国内の研究水準の向上のために、アウグスティヌスを中心に聖書解釈学研究の基礎文献の翻訳・刊行を行う。特にアウグスティヌスが『キリスト教の教え』を書く一つの契機ともなった異端ドナティスト派の神学者ティコニウス (Tyconius Afer 390 年歿) の著作『諸規則の書 *Liber regularum*』は、邦訳がなく、したがって国内ではほとんど研究されていないため、その早期の翻訳と出版が必要となる。

(2)国際的研究の次元においては、『キリスト教の教え』のヨーロッパ中世における受容史の解明に最先端の研究レベルで寄与することを目指す。『キリスト教の教え』の西洋中世思想において鍵となる受容を行ったのは、12 世紀の神学において重要な役割を担ったパリのサン・ヴィクトール学派である。サン・ヴィクトール学派の聖書解釈理論に関する最先端の研究は、研究代表者が兼任研究員をつとめる Hugo von Sankt Viktor Institut für Quellenkunde des Mittelalters, Frankfurt am Main において進められており、その基礎研究の成果は昨年、研究史において決定的重要性を持つ包括的な研究書 (*Bibel und Exegese in der Abtei Saint-Victor zu Paris. Form und Funktion eines Grundtextes im europäischen Rahmen*, Münster 2009 研究代表者の共著、680 頁) としてドイツで刊行された。研究代表者は、今後も同研究所におけるサン・ヴィクトール学派を中心としたアウグスティヌス聖書解釈学受容史の学際的・国際的研究プロジェクトにその中核的存在として参加しつつ、本研究においても同研究所との連携のうちに国際学会の企画開催 (現在実施がすでに決定している学会: 2011 年 3 月、ドイツ・マインツ大司教区アカデミーでの国際学会「聖書解釈における人名の意義」; 2011 年 6 月、イタリア・パドヴァ大学哲学部での国際学会「神学的徳としての信仰: 12 世紀から 16 世紀の聖書解釈学、倫理神学、司牧神学をめぐって」) に参画し、また国際研究会活動に基づく研究書・論文集の刊行を欧文で行ってゆく。

本年度 (平成 22 年度) は原典及び基礎文献の翻訳研究に重点を置く。『キリスト教の教え』に関しては、研究協力者がすでに翻訳を開始しており、2010 年 12 月までに下訳を終了する。研究代表者は随時、翻訳をチェックしてゆく。またティコニウスの『諸規則の書』の日本語訳、及び現在までのこの書についての海外の諸研究を包括的に参照・評価した註解を本年度末までに作成する。この翻訳・註解は研究代表者と研究協力者が協力して行い、その研究成果は『キリスト教の教え』原典翻訳・註解に直接活かされる。『キリスト教の教え』原典翻訳・註解は、毎月 3 回開催される研究会においてラテン語原典の検討に基づき行われる。この研究会は昨年度から行われており、すでに全 4 巻のうち、第 2 巻までは検討済みであり、第 3 巻と第 4 巻を本年度末までに検討終了する。その後、平成 23 年 1 月より研究協力者による下訳を、研究代表者が校閲し、同時に研究代表者と研究協力者が協働して註解を執筆する。昨年度の研究成果として、研究代表者は上記欧文研究書等の他に、聖書解釈学史に関する学会発表として中世哲学会 (「サン・ヴィクトールのリカルドゥスの思想における愛」2009 年 11 月、富山大学)、教父研究会 (「サン・ヴィクトール学派の神学をめぐって」2010 年 3 月、聖心女子大学) において研究成果を公表した。また論文「*Scriptura habet structuram* - サン・ヴィクトール学派の解釈学 - 」 (『哲学科紀要』36 号、上智大学、2010 年 3 月)、「サン・ヴィクトールのリカルドゥスの思想における愛」 (『中世思想研究』52 号、中世哲学会、2010 年 10 月) を刊行発表し、また「救済された理性 - サン・ヴィク

トール学派の聖書神学と観想論 - 」（『パトリステイカ』14号、教父研究会、2010年12月頃）が刊行準備中である。同じく研究協力者は日本カトリック神学会（『キリスト教の教え』第1巻における *res* について」2009年9月、上智大学）において研究成果を公表し、また論文「『キリスト教の教え』第2巻における偶像崇拜について」（『哲学科紀要』36号、上智大学、2010年3月）、「『キリスト教の教え』第1巻における *res* について」（『日本カトリック神学会誌』21号、日本カトリック神学会、2010年8月）を刊行発表した。この科学研究費補助金による研究会には、教父・中世哲学を専門とする上智大学及び他大学の大学院生が参加しており、若手研究者育成機会の役割も果たす。夏期の長期休暇には、上智大学及び他大学の大学院生も含め、集中した議論のために研究会合宿を行い、『キリスト教の教え』第4巻の徹底した検討を行った（2010年8月5日～8日 上智学院河口湖ハイム）。他にも若手研究者養成機会として、聖書解釈学史研究の重要な基礎文献である Manlio Simonetti: *Profilo storico dell'esegesi patristica*, Roma 1981 の翻訳を研究協力者が中心になって行い、大学院生を中心とした若手研究者に参加を促す。この翻訳は今年度中に完成させ、来年度の出版を目指す。